

- 鈴木道之助「木苧峠遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』昭49
- 羽鳥謙三「粘土鉱物分析」『中山谷遺跡』昭50
- 小林達雄「層位論」『日本の旧石器文化Ⅰ』雄山閣昭50
- 井尻正二・新堀友行編著『新版地学入門』昭51
- 松井健「考古学と土壌学」『考古学研究23-2』昭51
- 町田洋・新井房夫「広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰発見とその意義」『科学46-6』岩波書店昭51
- 鈴木道之助「下総台地における先土器文化の概要と変遷」『千葉県文化財センター研究紀要Ⅰ』昭51
- 町田洋『火山灰は語る』蒼樹書房昭52
- 新井房夫・町田洋・杉原重夫「南関東における後期更新世の示標テフラ層—特性記載とそれに関連する諸問題」『第四紀研究16-1』昭52
- 町田洋『テフロクロノロジー—日本の第四紀研究』昭52
- 杉原重夫・細野衛・大原正義「星谷津遺跡の自然地理」『佐倉市星谷津遺跡』昭53
- 加藤好武「一次鉱物分析」『鈴木遺跡Ⅰ』昭53
- 新井房夫「火山灰同定の方法と日本の広域火山灰」『どるめん19』昭53
- 鈴木道之助「下総台地におけるナイフ形石器終末期の諸問題」『神奈川考古7号』昭54
- 高野博之他『布佐，余間戸遺跡』昭56
- 『千葉県文化財センター研究紀要6』昭56
- 田村隆「復山谷遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』昭57
- 新堀友行・柴崎達雄編『第四紀』共立出版昭57
- ジョン・G.エヴァンス著 加藤晋平訳『環境考古学入門』雄山閣昭57
- 佐久間豊他『千葉県袖ヶ浦町清水川台遺跡発掘調査報告書』君津都市文化財センター昭58
- 金丸誠『佐倉市立山遺跡』昭58
- 町田洋・鈴木正男・宮崎明子「南関東の立川・武蔵野ロームにおける先土器時代遺物包含層の編年」『第四紀研究10-4』昭46
- 杉原重夫「地形の発達」『市川市史第1巻』昭49

千葉県君津市荘台遺跡出土の弥生土器

小 高 春 雄

I. はじめに

昭和56年、君津市内にあって、熱心な遺物蒐集活動を続けられてきた高橋聖雄氏の居宅を訪れた際に、最近、家の畑から掘り出したという土器を見せていただいた。

それは一見して、弥生土器の内でも古いものであることから、出土した場所に散在する該期の土器片をも合わせ、ここに氏の許しを得て紹介する機会を得たものである。

類例の少ない弥生土器の一資料として、また、君津市内における弥生時代の様相を知るうえに、新しい資料を付け加えるものとなろう。

II. 遺跡の位置と環境

小糸川下流域には、両岸に低平な洪積台地が広

がっているが、標高118mの三舟山の北麓には、上野台の台地を始めとして、広い台地群が認められる。

このひとつが荘台であり、今回報告する遺物が見つかったのは、この台地の北西端に当る場所である。この台地は、東西800m、南北300mの細長い楕円形を呈し、上面は平坦であり、北側の一部分を除いては周囲の傾斜は急である。また、西側から深い谷が入りこんでおり、周囲の台地群との境界をなしているが、その東端は、細い尾根道で南東の丘陵と結ばれている。

台地上面は一般に腐植の発達がよく、厚い黒土層の堆積が見られ、かつては、大部分が畑として利用されていたが、現在は、果樹園や一部の畑を除いて荒蕪地と化しつつある。



図1 遺跡の位置 (矢印 出土場所)

1. 坂田遺跡 2. 南子安遺跡 3. 上湯江遺跡 4. 上野台遺跡
5. 新御堂遺跡 6. 荘台遺跡 7. 道祖神社境内遺跡

この遺跡は、昭和33年、立正大学考古学研究室、同50年、野中徹氏によって小範囲の調査がなされており、前者については、坂詰秀一氏による報告がある(註)。それによれば、加曾利E I 式・同II 式・堀之内I 式土器の破片と石鏃が出土したが、「包含層は薄く、土器の包含状態も寂々たるもの」であったことから、既に高橋氏の採集していた古墳時代の祭祀遺物を中心として報告がなされている。後者については、縄文時代・中～後期の僅かばかりの土器片及び石皿等が出土したが、遺構は確認できず(註2)、両者共によく似た結果に終わっている。

しかし、これらの事実はこの遺跡が単に包含地の性格を示しているのではない。台地中央やや東寄りに、ローム面まで削り落した削平地があるが、そこにはかつて住居址の断面がいくつも認められたし、辛うじて削平を免れた床面が顔をのぞかせていた状態であった。遺物(久ヶ原式土器)の散布状況からして、これらの住居址は弥生時代後期

の所産であろう。また、高橋氏の所蔵する土師器の中には、明らかに住居址より出土したと思われるものが多い。更に、氏の話によると、古墳も何基か存在していた由である。実際、私の踏査の結果からすれば採集した遺物は、縄文時代早期・中期・後期・弥生時代中期・後期・古墳時代・歴史時代に及び、とりわけ、弥生時代後期・古墳時代の遺物の散布が顕著である。要するに、本遺跡は長期間にわたって営まれた集落址として捉えられるべきであろう。

周囲の遺跡を見ると、まず、隣接する新御堂、及び、上野台の台地があげられる。上野台ではかつての調査で、弥生時代～古墳時代にわたる100軒以上の住居址が検出されており、また、遺構こそ見出していないが、縄文時代の遺物も豊富であり、先土器時代の石器も出土している(註3)。一方、新御堂では、古墳一基と、墳丘下の縄文時代中期の住居址が調査されている(註4)。両台地ともに、とりわけ北側台地縁に沿って多くの古墳が

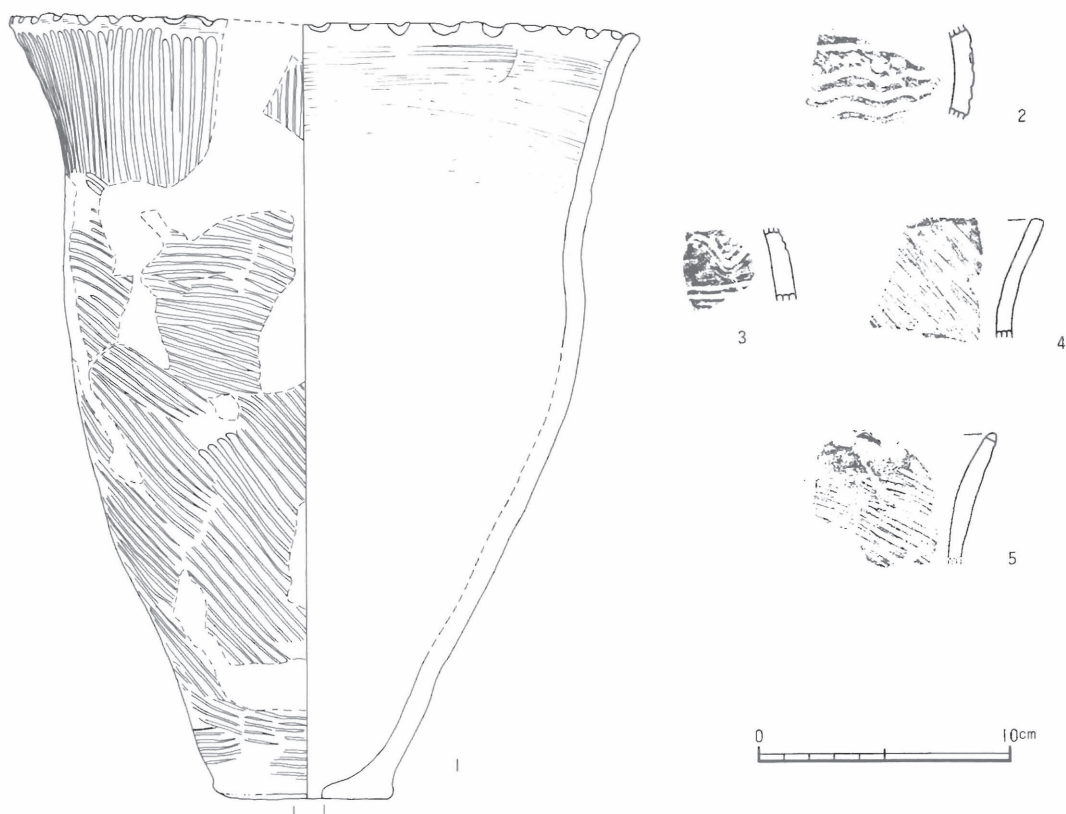


図2 出土遺物

所在している。上野台の西隣の上湯江遺跡も縄文時代～弥生時代にわたる遺物が豊富に出土することで知られている(註5)。これら一連の遺跡群は、小糸川下流域にあって北岸の遺跡がほとんど壊滅状態にある今日、南岸に残されたまとまった遺跡群として特筆されよう。

III. 出土遺物

No.1は甕(鉢)形土器であるが、底部に径1.1cmの円孔があることから、いわゆるコシキ形土器とも呼んでよいものである。口径25.2cm、底径7.2cm、器高31.2cmを計る。口唇部に内側斜め上から押捺を施し(外側からは行っていない)、胴部外面は上位に縦位の、中位以下に斜めの荒い条痕を施す。内面は、上位、細かいクシ目整形、中位以下はナデ整形である。外面の条痕の幅は広く、その断面は凹形である。器壁の一部は風化しており、胎土は砂粒を若干混入し、ザラザラした感じを与えている。色調は全体に赤褐色を呈し、外面中位以下にはススと思われる物質が全体に付着する。No.2は壺形土器の胴部上位～中位の破片である。太い沈線による波状文が6本認められ、2～3本間

には、RLの線文を施した後に、刺突を行っている。胎土良く、灰褐色を呈する。No.3は、壺形土器の胴部上位の破片と思われ、沈線による波状文と平行線が施される。内外面共にハケ目整形である。色調は外面褐色、内面明黄褐色を呈する。No.4、5は甕(鉢)形土器の口辺部である。No.4は平口縁、No.5は交互押捺による波状口縁を有するものである。いずれも、外面にも条痕による整形を施す。胎土、焼成よく、両者共に黒褐色を呈する。

さて、上記の出土位置とその相互的関連であるが、いずれも荘台遺跡中図1矢印の地点からであり、昭和50年の調査地点に隣接した畑中である。

次に、その特徴から型式を比定すると、No.1が小田原式(広義の宮ノ台式といってもよい)、No.2が須和田式、No.3～5が宮ノ台式土器であろう。

IV. 出土遺物の意義

君津市内における弥生時代中期の遺跡は坂田遺跡、南子安遺跡、道祖神社境内遺跡、及びこの荘台を加えて、計4遺跡ということになる。

坂田遺跡より出土した遺物は、記述のみであり、明確に判断しえないが、頸部に突帯を有する壺形

七器と思われる(註6)。南子安遺跡の場合は、壺、甕(鉢)の破片であったが、これは宮ノ台式土器の特徴をよく備えたものである(註7)。道祖神社裏古墳より出土した遺物は、古墳の周溝確認時に出土したもので、甕の破片若干が報告されている(註8)。

さて、本遺跡出土の遺物を、前記3遺跡と比較すると、No.1, 2の遺物はより古く遡るものと思われ、No.3以降の遺物は同時期か、それほど時間差の認められない頃のものといえよう。注目すべきはこのNo.1, 2の遺物である。最初に、No.1の甕(鉢)形土器であるが、条痕が器外面全体に施されているところから、杉原荘介氏の提唱(註9)に従えば、小田原式土器ということになろう。しかし、小田原式土器の内容は充実の一途を増している宮ノ台式土器と比較すると余りに貧弱である。一々の出土資料をもってとやかくいうことはできないが県内において、類品を求めてみると破片のみであり、これと全く同一の特徴を有する壺形土器を私は知らない。「小田原式土器のセットの一器種をなすもの」かもしれないとの予想を与えておきたい。

次に、一片ながら出土した須和田式土器は、もちろん君津市内では初見であるが、県内においてもきわめて類例の少ないものである。

ところで、対岸の上野台遺跡の内、南側端にあ

たる地域は、かつて我々が一部分調査を行っており、そこは、荘台遺跡とは谷をへだてて指呼の間にあり、杉田式、干網式等、晩期後半の、諸型式が出土している。それは、この谷をめぐる、縄文時代～弥生時代にかけて、人間の活動がみられたことを物語っているが、数少ない該期のしかも、継続的な集落の存在が予想しうる地域として注目したい。

(2班・千原台事務所)

註

- 1) 「千葉県君津郡荘台出土の祭祀遺物」、『銅鐸14号』 坂詰秀一 昭33
- 2) 筆者実見
- 3) 「上野台遺跡」、『日本考古学年報29 1976年版』小高春雄 昭53
- 4) 『元秋葉台32号墳発掘調査報告書』 野中徹他 昭52
- 5) 『千葉県君津郡君津町誌、後編』 昭48
- 6) 註5文献中に所載
- 7) 「千葉県君津市南子安遺跡出土の弥生土器・土師器」、『いにしえ第2号』小高春雄 昭53
- 8) 『道祖神社裏古墳調査概報』 大塚初重他 昭51
- 9) 『弥生式土器集成、本編2』 杉原荘介 昭43

関東地方の埴輪生産遺跡

萩原恭一

1. はじめに

現在、全国における埴輪遺跡の総数は、発見・発掘の両方で40遺跡を超え、又、基数にして170基を超えている。その中でも特に開発の勢いの激しい関東地方では、全国の発見・発掘例の約8割近い130基余りを認める事が出来る。

埴輪窯跡に関する研究は、既に坂詰秀一氏・塩野博氏等に依る集成及び分析が発表されている。坂詰氏は平面・縦断面形態を主眼とし、塩野氏は平面形態を主眼として、その分類を行なっている。

それを簡単に紹介する。

(1)坂詰氏の分類

- ①半地下式無段焚口分離(A)登窯
- ②半地下式無段焚口分離(B)登窯
- ③半地下式無段複室登窯
- ④トンネル式有段登窯
- ⑤トンネル式無段登窯
- ⑥半地下式有段登窯
- ⑦半地下式無段(A)登窯
- ⑧半地下式無段(B)登窯